

胡耀邦伝のための覚書き

柴田 哲雄

はじめに

1989年4月15日、胡耀邦前総書記（当時）が心臓発作で急死した。胡耀邦の死は、世界を震撼させた同年6月の第二次天安門事件が起こる端緒となった。胡耀邦は総書記在任中、学生の間で高まっていた民主化要求に対して、柔軟に対応しようとした挙句、事実上の最高権力者・鄧小平らから厳しく批判されて、87年1月に総書記辞任を余儀なくされていた。いわば失脚の最中に死去したのである。胡耀邦の死をきっかけに学生は行動を開始した。中国政府の公文書はその模様を以下のように伝えている。

4月19日午前11時から、清華大、北京師範大、北京科学技術大、その他の大学の学生たちが花輪を天安門広場に持ち込んだ。北京師範大の学生千人余が横断幕を掲げ、道々、「耀邦は死なず」「独裁打倒」「人民は人民の書記を愛し、人民の書記は人民を愛す」「五・四の伝統を守ろう」「民主、科学万歳。教育万歳、教師万歳」などのスローガンを叫んだ（張良、2001、63頁）。

このように学生は胡耀邦への哀悼を通して、民主化を求める意志を表明していた。この背景には、民主化要求に対して締め付けの強化を図る鄧小平や保守派の高級幹部に対する抗議、改革開放の副産物であるインフレや腐敗に対する不満、さらに同時期にゴルバチョフのイニシャチプの下で進行していたソ連・東欧諸国の民主改革の影響などがあった。やがて広範な市民のみならず、一部の政府機関の関係者まで合流して、天安門広場でデモが繰り広げられるように

なった。5月中旬にはゴルバチョフが訪中したこともあって、デモは最高潮に達し、広場を100万人近くの人々が埋めつくした。一部の学生らはハンストまで行なうようになった。しかし、鄧小平はデモ隊の民主化要求を頑として拒み、5月20日には北京市に戒厳令を布告した。そして6月4日に人民解放軍に弾圧を命じるに至り、発砲によって数多くの学生や市民が殺傷された。これが第二次天安門事件である。

なお、2010年にノーベル平和賞を受賞した劉暁波は、米国留学中に祖国での民主化の気運の高まりを知ると、急いで帰国し、学生らのデモに合流して、ハンストを敢行した。そして最後まで天安門広場に残留して、人民解放軍と交渉して発砲しないように要求するかたわら、学生にも撤収するように説得して、ぎりぎりのところで多くの流血の惨事を回避している。その後、逮捕されて、約2年間投獄されることとなった。また、胡耀邦の後を襲って総書記に就任した趙紫陽は、民主化を求める学生らに対して柔軟な対応を模索した挙句、鄧小平の逆鱗に触れて解任された。趙紫陽はその後も自己批判を拒んだために、2005年に死去するまで、自宅で軟禁処分を受けることとなった。後任の総書記には、鄧小平の鶴の一声で、上海市委員会書記であった江沢民が就任した。

さて、民主化を求める学生や市民によって、その死を哀悼された胡耀邦とは一体どのような人物だろうか、どのような経歴を経てきたのだろうか。なぜその死後に胡耀邦は民主化のシンボルになったのだろうか¹⁾。以下で詳しく見ていくことにしよう。

I. 少・青年期：革命への参加と試練

誕生とその背景

胡耀邦は1915年11月20日、湖南省瀏陽県で生まれた。胡耀邦の出生の前後から、幼少期にかけての中国の状況について見てみよう。中国は日清戦争の敗北後、列強諸国による分割の危機に陥っていた。孫文は、無能な清朝を打倒するために、長年にわたって革命運動に奔走してきた。そしてついに1911年に辛亥革命を成功させて、アジア初の共和制国家・中華民国を樹立した。

しかし中華民国の政情は安定しなかった。清朝の実力者にして、北洋軍閥の巨頭である袁世凱は、孫文との密約によって、幼帝の溥儀を退位させることと引き換えに、大總統のポストを獲得した。ところが袁世凱はあろうことか、独裁化を企てて、孫文らを弾圧し、自ら皇帝になるという野心を露呈するに至った。さらに第一次世界大戦勃発によって、欧州列強が中国から一時撤退したのを機に、日本が中国に対する帝国主義的野心を募らせて、二十一カ条要求を突き付けると、袁世凱は最終的に世論の強い反対を押し切って、一部を除いて受諾してしまっ

た。袁世凱がほどなくして急死すると、部下の軍閥の間で覇権争いが始まった。

孫文らも広東省を拠点として、中国国民党を結成し、巻き返しを図ろうとしていた。一方、ソ連とコミンテルンの強力な支援の下、各国で共産党の設立が推し進められ、中国共産党も1921年に結成されるに至った。孫文はソ連に接近し、ソ連から援助を受ける見返りに、共産党員の国民党加入を認めた（第一次国共合作）。そして国民革命、すなわち北方軍閥の打倒による中国の再統一を目指すこととした。孫文の死後、蒋介石がその遺志を継ぐ形となって、26年7月より北方への軍事行動（北伐）を本格化させることとなった。

さて、胡耀邦に話を戻すことにしよう。胡耀邦は父・胡祖倫と母・劉明倫の9番目の子どもとして生まれた。夫婦には6男6女、計12人の子どもがいたが、成人したのは胡耀邦とその兄の2人の息子、それに3人の娘だけであった。胡耀邦の生家は中規模農家であり、本来であれば、比較的ゆとりのある生活を送れるはずであった。しかし軍閥から様々な名目の重税を課されたことから、ただでさえ子沢山だった胡耀邦の生家は、田畑の収益だけでは生計を立てることができなくなっていた。そこで母が瀏陽県の特産の布を織るだけでなく、父も石炭を担いで運搬するようになった。胡耀邦は後年「父は長きにわたって運搬夫をしていたために、両肩は二つの大きな繭のように腫れ上がってしまっていた」と回想している（『胡耀邦（1915-1989）』第1巻5頁）。

胡耀邦の故郷の付近には、彼の生家以外にも、胡氏一族が居を構えていた。胡氏一族は、16世紀に江西省高安県から瀏陽県へと家族を伴って移住してきた胡允欽の末裔である。胡耀邦は胡允欽の12代目の子孫に当たる。また、胡氏一族は客家でもある。

客家とは、元々の故地である華北が北方系の遊牧民族に征服されたために、南方に移住せざるを得なかった漢民族の子孫である。移住の波は、4世紀から18世紀中葉までの間に5回ほどあったとされている。漢民族は理屈の上では、一つの民族とされているが、傍目には異民族の集合体と見紛うほど、地域によって言語・習俗などが大きく異なっている。客家は南方の土着の漢民族に同化することなく、独自の社会を保ち続けてきた。古い中国語の発音を残した独自の言語・客家語を話し、独特の集団住居に住むなどしてきたのである。客家は、土着の漢民族からしばしば蔑視や迫害を受けてきたが、こうした逆境を生き延びるために、反骨精神旺盛で、教育熱心であり、行動力に富むといった特徴をあわせもつようになった。

このような特徴を有する客家から、近現代の中国史をつくり変える傑出した人物が数多輩出されている。鄧小平はその一人であり、胡耀邦もその一人であると言ってよいだろう。ただし鄧小平の家系は、科挙（官吏登用のための資格試験）の合格者を輩出した名家であったが、胡耀邦の家系は、そのような名家ではなかった。その他にも、太平天国の乱の洪秀全、孫文などがある。客家が中国のユダヤ人と言われるゆえんである。

勉学と革命運動

胡氏一族は代々農業を生業としながらも、客家の伝統を受け継いで教育熱心であった。胡耀邦は5歳になると、一族の私塾である「種桃書屋」で勉学することになった。「種桃書屋」の教師は、胡耀邦の父方の遠縁に当たる胡祖儀であった。胡祖儀は開明的な人物であった。1910年代後半から20年代初頭にかけて、科学と民主主義を標榜した五四文化革命が起ると、胡祖儀は伝統的な儒教教育に飽き足らなくなって、西洋式の学校を創設することを思い立ったのである。こうして胡氏一族の子弟のために新たに開校されたのが興文小学である。胡耀邦は7歳になると同校に通うようになった。同校は女子児童の入学を認めるなど、当時としては画期的な方針を打ち出していた。出来の良い生徒だった胡耀邦は、胡祖儀から目を掛けられて、折に触れて中国を救った歴史上の英雄の話聞かされたという。

胡耀邦は興文小学の1～4年生までの課程（初級小学）を修了すると、10歳の時に瀏陽県文家市の礼文小学の5～6年生の課程（高級小学）で学ぶことになった。同校には共産党員の教師が、校長をはじめ何人もいた。当時、胡耀邦と机を並べていた母方の遠縁に当たる楊勇（後に人民解放軍上将）は以下のように回想している。

……耀邦は出来の良い生徒で、私は腕白小僧でした。勉強では彼が私を手伝ってくれ、喧嘩では私が彼を手伝ったものです。（中略）共産党員の陳世喬と甘思藻らはいつも生徒に向かって、列強を打倒して国家の独立を勝ち取れ、農民は組織をつくって立ち上がれ（中略）などといった道理を説いて回っていました（『胡耀邦（1915-1989）』第1巻8頁）。

胡耀邦はこうした共産党員の教師から感化されるに至った。そして熱心に革命歌の合唱に参加したり、迷信打破の宣伝工作に参加したり、また時には校外で「打倒軍閥」「打倒列強」などのスローガンを壁に書いたりするようになった。

なお、胡耀邦が礼文小学に在籍している時に、毛沢東が同校にやって来たことがある。孫文亡き後、国民党の指導者となった蒋介石が、急速に拡大する共産党の勢力に恐れをなして、1927年4月に反共クーデターを執行すると、第一次国共合作は崩壊に向かった。そこで毛沢東らは同年9月に、再起を期して、湖南省や江西省の辺境地域で武装暴動を起こすこととした。武装暴動はたちまち失敗に終わり、毛沢東は紅軍を率いて井岡山に撤退せざるを得なくなったが、その直前に同校の運動場で紅軍の大会を開いたのである。胡耀邦は興奮と好奇心を抑えることができずに、壁によじ登って、毛沢東と紅軍を眺めていた。

胡耀邦は1929年の夏に、13歳で礼文小学を卒業すると、成績が抜群だったことから、その年の秋に、瀏陽県立中学へ進学することとなった。当時、胡耀邦の生家を含む郷里の人々に

とって、中学への進学は、それこそ王朝時代の科挙の合格と同程度に榮譽の出来事であった。そこで胡耀邦の家族が苦勞して学資を捻出しようとしたのは無論のこと、胡氏一族も援助することとした。もっとも同校は翌30年夏に閉校を余儀なくされてしまった。当時、瀏陽県とその周囲の情勢が混乱を極めていたためである。28年に国民党政権の下で中国の統一が実現したとはいえ、共産党が武装蜂起していたのみならず、国民党内でも蒋介石の支持勢力とその反対勢力の覇権争いが内戦にまで発展し、瀏陽県にも相次いで戦火が及んでいたのである。

胡耀邦は中学に進学した1929年の冬休みに、秘密裏に中国共産主義青年団に加入した。そして閉校を機に、わずか14歳で職業革命家の道を歩むことにした。本来ならば『論語』に「十有五にして学に志す」と記されているように、安全な他地域の中学で勉学を継続すべきであったが、そうした選択肢をとらなかったのである。

胡耀邦のこうした決断の背景には、礼文小学の教師の影響ばかりでなく、瀏陽県とその周辺地域の情勢や風潮の影響もあつただろう。清朝末期から中華人民共和国成立期にかけて、同地域は、まさに革命揺籃の地と言い得るような情勢にあつた。同地域では元来、血縁・地縁関係が濃密であつた。そうした関係を母体にして、明朝滅亡後から自然発生的に哥老会などの秘密結社が組織されてきた。秘密結社は、その構成メンバーの大半が貧困層であつたことから、自ずと悪徳官僚・地主を敵視して、しばしば反乱を起こすようになった。反骨精神旺盛な客家が多かつたことも、秘密結社の隆盛に寄与したことだろう。

清朝末期になると、孫文率いる中国同盟会が、清朝打倒の運動を、瀏陽県とその周辺地域で推進する際には、反抗の気風に満ちた秘密結社を利用するようになった。第一次国共合作の崩壊後に、共産党が紅軍を同地域で組織するに当たっても、ほぼ同様のことを行なっている。そのため一族・村落中の男性がこぞって紅軍に参加する光景が散見された。同地域の紅軍殉死者の名簿には、同姓同族の者が実に多かつた（鄧義民ほか、2012、28-33頁）。胡耀邦の親族からも、前出の楊勇や父方の遠縁者などがまず紅軍に身を投じており、彼らの後を追うようにして、胡耀邦もまた参加を決意したのである。

また当時、瀏陽県では、功名を立てることを重視するという風潮がとりわけ強かつた（盛正泉、2016、15頁）。こうした風潮の下で、幾多の政治・軍事指導者が同県から輩出されている。清朝末期に明治維新に倣つた改革・戊戌の変法を指導した譚嗣同が最も著名だろうが、その他にも辛亥革命の指導者の一人となつた焦達峰がいる。共産党の指導者については、胡耀邦や楊勇の他にも、鄧小平時代に八大元老の一人になつた王震と宋任窮、人民解放軍の初の女性少将になつた李貞などがいる。胡耀邦も幼少期から同県のそうした風潮によって感化されてきたのは間違いないだろう。前述したように、幼少期の教師であつた胡祖儀から折に触れて歴史上の救国の英雄の話が聞かされてきたのはその一例である。胡耀邦がわずか14歳で「国家が危機

に瀕している時に、学窓の外部の出来事に耳を塞ぎ、一心にただ聖賢の書だけを読んでいられようか？」という切迫感に駆られて（『従紅小鬼到総書記』上巻19頁）、学生運動家ではなく、あえて職業革命家の道を選んだのもそのためだと言えよう。

最初の試練：「AB 団」事件

胡耀邦が共産党の革命運動に身を投じた当時、党中央の実権を掌握していた李立三は、都市での蜂起を主とした全国武装蜂起を企てたものの、ことごとく失敗に終わり、革命戦術の誤りを追及されて失脚を余儀なくされていた。一方、党内の非主流派であった毛沢東は「農村から都市を包囲する」戦略を立てて、各地の辺境地帯に根拠地（ソビエト区）を築き上げ、1931年11月に江西省の山間の町・瑞金を首都とする中華ソビエト共和国臨時政府を樹立した。もっとも党中央の実権はなおも毛沢東の手にはなく、ソ連への留学経験があり、ソ連とコミンテルンの意を体していた陳紹禹や秦邦憲の手に帰っていた。

職業革命家となった胡耀邦は、共産党の根拠地に赴き、青少年工作に携わるようになった。その工作の一端を1932年の胡耀邦自身の報告から見ることにしよう。

……例えば宣伝隊や突撃隊を組織して、新兵の家族が秋の収穫や柴刈りを行なうのを手伝った。また調査隊を組織して、逃亡兵に対して帰隊を促すなどした。特に長汀、興国、万太、博生、瑞金、永豊では、多くの児童団員が一人当たり7、8名、多い者は十数名の青年を説得して、紅軍に入隊させた。このようにして紅軍拡大や帰隊に際して、児童団が寄与した人数は4千名以上に上った（「共産青年団領導之下的蘇区共産児童団三個月来的活躍情形」395-396頁）。

もっとも、胡耀邦は上記のように目覚ましい成果の一端を挙げながらも、「主としてソビエト紅軍への支援工作の参加に偏重していて、児童団それ自体の基本的任務、すなわち共産主義教育を放棄している」と反省点をも挙げている（同上397頁）。

また当時、胡耀邦は毛沢東の弟である毛沢覃と親しく付き合うようになっていた。当時、二人の共通の友人だった蔡孝乾（台湾出身で台湾地区の党の要職に就いていたが、逮捕後に国民党に転向した）の回想によれば、彼と胡耀邦と毛沢覃の三人は「しょっちゅう夜中まで語り合った」。また「毛沢覃はいつも賀懿（筆者注：毛沢覃の妻、毛沢東の妻・賀子珍の妹）の届けもの（筆者注：唐辛子炒めや鶏卵）を持って来ては包み隠さず開き」、彼と胡耀邦も『『盛大な』ご馳走のお裾分けにあずかった』。「毛沢覃は才気あふれる洒脱な人物であり、暇な時はいつも胡耀邦を訪ねて将棋を指すか、小説を読んでいた」（蔡孝乾、1978、92頁）。その頃から、

毛沢東は弟などを通して、胡耀邦の名を耳にしていた可能性があるだろう。

胡耀邦の職業革命家としての人生は、充実した滑り出しを見せていたが、17歳の時に大きな試練に遭遇することになる。「AB (Anti-Bolshevik、アンチ・ボルシェビキの略) 団」事件に巻き込まれて、粛清の危機にさらされたのである。

「AB 団事件」の背景について見ることにしよう。中華ソビエト共和国が成立する2か月前の1931年9月に、満州事変が勃発し、翌32年3月に満州国が成立して、東北地方は事実上日本の植民地と化していた。しかし蒋介石は抗日よりも対共産党攻撃を優先する方針をとっていた。蒋介石の国民党軍から度重なる包圍攻撃を受けて、中華ソビエト共和国は崩壊の危機にさらされていた。こうした極限状況の下で、国民党軍と相対峙する紅軍の各部隊の間では、相互に疑心暗鬼が高まっていった。そしてついに毛沢東は自らに反対する紅軍の部隊に「AB 団」、すなわち国民党スパイというレッテルを貼って、摘発と粛清を開始した。共産党中央も毛沢東の行動を制止するどころか、支持したこともあり、摘発と粛清の範囲は拡大され、最終的に7万人余りの党員の命を奪うことになったと見積もられている。

胡耀邦は当時、湖南省と江西省の境界域の根拠地に派遣されて、当地の共産党組織・湘贛省党委員会の傘下で活動していたが、突如「AB 団」の嫌疑が降りかかってきた。胡耀邦は知識分子である上に、恩師の一人が「AB 団」とされて、粛清されたことから、彼もその恩師の影響を受けて、「AB 団」に加わっているにちがいないと推測されたからである。胡耀邦がせいぜい中等教育までしか受けていなかったにもかかわらず、知識分子とされたのは、当時の共産党内には非識字者が多数を占めていたからにはほかならない。共産党は、その後の整風運動から文化大革命に至るまでの間、一貫して知識分子に対して疑惑の目を向けてきたが、「AB 団」事件がその端緒であったと言えるだろう。

その後、湘贛省党委員会では、「AB 団」の摘発に消極的なトップの書記が解任され、高級幹部にまで摘発が及ぶようになり、湘贛ソビエト区ソビエト政府主席の袁徳生、同省党委員会常務委員の劉徳凡らが粛清される事態となっていた。もしも胡耀邦がずっと同省党委員会の下に留まっていれば、間違いなく粛清されただろう。胡耀邦を救ったのは、当時、中国共産主義青年団ソビエト区中央局巡視員の馮文彬だった。馮文彬は同省党委員会に立ち寄った際、胡耀邦の嫌疑を知るや、胡耀邦を瑞金の中国共産主義青年団中央に連れて行って、審査することにしたいと申し出たのである。こうして胡耀邦は馮文彬に連れられて、国民党の封鎖戦をかいくぐり、1933年1月に瑞金に到着した。

もっとも、瑞金に到着した後も、胡耀邦の嫌疑が晴れることはなく、湘贛省党委員会は中国共産主義青年団中央局に対して、彼を連れ戻すようにしきりに要求していた。当時、胡耀邦はスパイという濡れ衣を着せられ、粛清されかねない事態に直面して、激しく懊悩していた。馮

文彬の以下のような回想からも、それが読み取れるだろう。

……私は耀邦に党を信じ、辛抱強く待つように励ました。(中略) ほどなくして、私は福建省に派遣されて、革命工作活動を行なうことになったが、耀邦は目に涙をあふれさせながら、私を見送り、次のように言った。「あなたが行ってしまうと、私はどうなるのでしょうか？」私は彼を慰めて次のように言った。「組織は正しい結論を下すだろう。焦らず、あきらめてはいけないよ」(『胡耀邦 (1915-1989)』第1巻29頁)。

胡耀邦は最終的に審査の結果、「AB団」の一員という嫌疑が払拭されて、1933年9月に晴れて共産党に入党することとなる。しかし胡耀邦は生涯、この事件を忘れ去ることができなかった。胡耀邦は、死去する数日前に見舞いに訪れた馮文彬に向かって次のように言った。「当時、もしもあなたが私を連れて行かなければ、私は終わっていただろう。もしも私を送り返していても、私は終わっていただろう」(同上30頁)。「AB団」事件は、胡耀邦にとって、共産党支配の不条理な側面を、身を以て体験する最初の機会となった。なお、胡耀邦は総書記就任後、「AB団」事件の犠牲者の名誉回復の先鞭を付けている。

政治資産：長征と抗大

1934年10月、ついに中華ソビエト共和国は、国民党軍の包囲攻撃に耐えかねて、事実上崩壊するに至る。毛沢東らは「北上抗日」をスローガンに掲げて、首都・瑞金を放棄し、8万6000人の紅軍を率いて、陝西省北部の根拠地を目指すことにしたのである(延安がその後首都となる)。約1万2500キロに及ぶこの大移動を長征と呼ぶ。長征がいかに過酷なものであったかは、35年10月に目的地にたどり着いた時には、紅軍が当初の10分の1の8千人にまで減少していたことから明らかだろう。国民党軍の追撃を受けながら、徒歩で行進して、大河や雪山などの難所をいくつも超えなければならなかったのである。

19歳を迎えようとしていた胡耀邦も、長征に参加し、九死に一生を得る体験をしている。1935年2月に貴州省遵義で、国民党の軍用機の爆撃によって負傷したのである(ちなみに遵義で開催された共産党中央政治局拡大会議は、毛沢東の指導権が確立される端緒となった)。この時の爆弾の破片は手術によっても完全に取り除くことができず、その一部は体内に残ったままであった。胡耀邦は後年になって、入院時の心境を振り返って、以下のように述べている。

……私はすでに死を気に掛けないようになっていた。他にいかなる選択肢などもなく、私

たちは戦闘を続けることしかできなかったのである。戦闘を行なわなければ、(敵によって) 殺されてしまうのであった(『胡耀邦(1915-1989)』第1巻48頁)。

胡耀邦は負傷を負いながらも、殺すか殺されるかという過酷な難路を乗り越えて、長征を成し遂げた。共産党の幹部の間では、長征に参加した者は「長征幹部」と呼ばれて、特別な敬意が払われている。胡耀邦がその後、次々と要職に抜擢され、最終的に総書記の地位にまで上りつめるに至った要因の一つとして、「長征幹部」という政治資産を有していたことを挙げる事ができよう。

1937年7月に日中戦争が勃発して、ついに日本軍の侵攻は中国全土に拡大した。蒋介石の国民党は、前年12月の西安事件(対共産党軍事作戦の督促のため西安に飛来した蒋介石を、内戦停止・抗日戦などを要求する張学良らが一時監禁した事件)と日中戦争を受けて、共産党による抗日民族統一戦線結成の呼びかけに応えることとした(第二次国共合作)。ただし共産党は第一次国共合作時のように国民党に合流したわけではなく、依然として独自の軍隊と領域を保ち続けていた。

胡耀邦はちょうどその頃、抗日軍政大学(略称は抗大)の第二期に入学することになった。抗大は、共産党が軍幹部養成のため設置した紅軍大学を前身とし、1937年に延安で設立された。当初は軍の中堅幹部、後には各地から参集する知識青年を対象に、短期間で思想・政治教育を施し、前線に送り込む役割を果たした。各根拠地にも抗大の分校が設立され、抗日戦の8年間に十数万人の軍幹部を養成した。文化大革命時代に毛沢東に次ぐナンバー2となった林彪が校長を務め、毛沢東もまた自ら教鞭を執っていた。その初期の卒業生には、総参謀長などを歴任した羅瑞卿をはじめとして、錚々たるメンバーがいる。

胡耀邦がそうした錚々たるメンバーの中でも、際立った存在であったことは、1937年8月に卒業した後も、毛沢東直々の指名によって同校に残り、政治部副主任に任じられたことから明らかだろう。「長征幹部」であったことに加えて、抗大の有力なOBであったことも、胡耀邦の政治資産になったのである。その後、胡耀邦は23歳の若さで、中央軍事委員会総政治部組織部副部長に任じられ、ほどなくして部長に昇進している。

当時、胡耀邦は自らを抜擢した毛沢東を全面的に擁護していた。胡耀邦は直々に毛沢東に対して抗大の校誌への寄稿を依頼し、「反対自由主義」という論稿を受け取った。「反対自由主義」において、毛沢東は「自由主義の起源はプチブルジョアジーの利己主義にあり、個人の利益を第一に置き、革命の利益を第二に置いている」と論じていた。毛沢東が「反対自由主義」を執筆する際に念頭に置いていたのは、胡耀邦の報告である。胡耀邦は、抗大における知識青年の学生の多くが国民党の支配地域から来ているせいか、組織規律の観念が薄弱であり、自由

散漫な現象が深刻になっていると、毛沢東に報告していたのである。胡耀邦はまた「反対自由主義」の読後感を校誌に発表して、そうした抗大の学生の思想状況と絡めながら、毛沢東の主張に全面的に賛同する旨を述べている（同上77頁）。

二度目の試練：整風運動

胡耀邦は延安に到着してからは、毛沢東の信頼を勝ち得て、充実した日々を送っていたように映るが、その後、「AB団」事件に勝るとも劣らないほどの大きな試練を受けることになる。胡耀邦は26歳の時に結婚するが、結婚の翌年の1942年から43年にかけて展開された整風運動に際して、妻の李昭が国民党のスパイという嫌疑を受けたのである。

日中戦争勃発後、第二次国共合作が成立したものの、戦争が長引くにつれて、当初の団結の熱気は消え失せ、両党間の関係は冷却化し、軍事的な小競り合いまで発生するようになっていた。そして延安の根拠地は、国民党軍によって経済封鎖されるに至った。こうした危機の最中に整風運動が行なわれたのである。

整風運動は、毛沢東が共産党内の思想上の主観主義、活動上のセクト主義、表現上の空言主義を克服し、マルクス主義思想の水準を高め、作風を改めようと呼びかけたことから始まった。要するに毛沢東は、ソ連やコミンテルン、並びにその意を体していた陳紹禹らの影響力を完全に排除して、自らのイデオロギイ的権威を確立し、マルクス・レーニン主義の中国化としての毛沢東思想によって、党内を統制しようとしたのである。また毛沢東には同運動を通して、知識人に思想改造を強制するという目論見もあった。当時、中国の各地から知識人が共産主義に憧れて、延安に集まって来ていたが、彼らの多くは元来、自由主義を信奉しており、共産党を支持しつつも、しばしばその支配の実態に対して、公然と批判していたからである。同運動はまさに、中華人民共和国成立後に大々的に展開される知識人弾圧の先駆けとなった。

整風運動は、中央社会部長兼情報部長の康生の指導の下で、次第に行き過ぎの様相を呈するようになる。毛沢東率いる党中央に忠実な多くの黨員や知識人でさえ、拷問による自白を証拠として、国民党のスパイ、裏切り者、内通者といったレッテルが貼られるようになったのである。高級幹部の妻たちにも、延安に潜入した国民党のスパイという疑惑がもたれるようになった。胡耀邦の妻・李昭は、共産党の女性幹部養成のために設置された延安の中国女子大学を卒業し、すでに入党していたが、彼女のような経歴の者ですら、国民党のスパイという嫌疑から免れることができず、罪を認めて自己批判をするように求められていた。当時、李昭は長男・胡德平を出産して、まだ日が浅かったことから、こうした境遇は心身に相当堪えたにちがいない。

胡耀邦は当時、最愛の妻が国民党のスパイだなどとは想像すらできなかった。それどころ

か、共産党の組織系統にほとんど隙らしい隙がない延安に、かくも多くの国民党のスパイが潜入して来たという前提そのものに対して、疑念を抱くようになっていた。胡耀邦は自らがかつて「AB団」という濡れ衣を着せられた体験に照らして、整風運動に際しても、多数の冤罪の事案があるにちがいないと考えた。胡耀邦は試しに全く疑念の余地がない何人かの若者を拘束して、自白を強要したところ、いずれもスパイだと認めるに至った。そこで胡耀邦は、十分な証拠なしに自白を迫ることを禁じるなどの措置をとることとした。もっとも当時の風潮の下では、胡耀邦のそうした措置にも自ずと限界があった。後年になって胡耀邦自らが「延安時代、私は組織工作を行っていたが、何人かの幹部を誤って処分した」と認めていることから（『胡耀邦文選』98頁）、それは明らかだろう。

当時の胡耀邦には最愛の妻ですら守るすべがなかった。ある夜更けに李昭の住居を訪れ（当時、胡耀邦夫妻はまだ世帯者用の住宅をあてがわれておらず、別々に暮らしていた）、彼女に以下のような言葉をかけることしかできなかったのである。

……李昭、僕は君を理解しているよ。君は早くから革命に参加し、善良そのもので、共産主義に対して固い信念をもっている。僕は君がこの試練に耐えられると信じているよ。党は君を審査するが、これは最も現実的な試練だ。君は实事求是に従って、正しいことは正しいとし、間違っていることは間違っているとして、心にもないことを言うてはいけないよ。党と同志を信頼するんだ（『従紅小鬼到総書記』上巻78頁）。

李昭は胡耀邦の言葉のおかげで、不安な気持ちを鎮めて、勇気を得ることができた。そして厳しい審査に耐え抜いて、最終的に国民党のスパイという嫌疑を払拭することができた。整風運動は、胡耀邦自らにではなく、産後間もない最愛の妻に濡れ衣が着せられたことから、彼にとってはある意味で「AB団」事件以上に大きな試練になったことだろう。胡耀邦は10代から20代にかけて、共産党支配の不条理な側面を、二度も身を以て体験することになったのである。

II. 建国から文化大革命まで

第7回党大会

1945年4月から6月にかけて開催された第7回党大会に、胡耀邦は正式代表544名の一人として参加した。当時、まだ弱冠29歳の若さであった。こうした異例とも言える昇進の背景には、「長征幹部」や抗大の有力なOBという政治資産を有していたことに加えて、毛沢東の信

頼を勝ち得ていたことがあるだろう。

第7回党大会では、毛沢東思想を党の指導思想とすることが正式に決議されたほか、毛沢東によって戦後の政権構想である連合政府論が提起された。連合政府論とは、国民党による一党独裁を否定して、共産党と各党各派・無党無派が民主的な連合政府を樹立すべきだとする主張である。

連合政府論は、中国の革命プログラムにおける新民主主義の段階と社会主義の段階の中、前者に照応するものとされていた。新民主主義の段階では、プロレタリアートの指導の下で、農民のほか、民族ブルジョアジー（中国を半植民地支配する欧米諸国や日本の資本と対立的な、土着の生産活動により富を蓄積した資本家）、プチブルジョアジーを含めた諸階級の連合独裁を想定していた。また国民経済の発展に有益である限り、民族ブルジョアジーやその他の諸階級の経済活動は保障されることになっていた。

新民主主義の段階は、社会主義の段階に移行するまでの過渡的なものとはいえ、本来は長期にわたるものと考えられていた。しかし実際に共産党が革命に勝利して政権を奪取すると、わずか数年で社会主義の段階に移行してしまっている。なお後述するように、元『人民日報』編集長の胡績偉によれば、胡耀邦は社会主義よりも新民主主義を信奉していたとのことである。

政治将校

1945年8月に日本が降伏すると、国民党と共産党の間では、共通の敵がなくなったこともあり、緊張状態が高まっていた。そこで米国政府の仲介の下で、蒋介石と毛沢東による巨頭会談が行なわれ、同年10月には内戦を避けるための双十協定が発表された。しかし翌46年7月以降、国共内戦が再勃発することとなり、最終的に共産党が勝利して、49年10月に中華人民共和国が成立した。一方、敗れた国民党は逃れた先の台湾で中華民国を存続させた。

国共内戦が再勃発すると、胡耀邦も前線に政治将校として赴いた。ソ連共産党は、党による赤軍への指導を貫徹するために、各部隊に政治将校を配置していたが、中国共産党もそれに倣ったのである。胡耀邦は1948年8月には、10万余名からなる大兵団・華北野戦軍第1兵団（後に第18兵団と改称）の政治部主任に昇進している。

政治将校としての胡耀邦の活躍振りの一端について見てみよう。共産党が国民党に勝利することができた要因の一つとして、国民党軍の部隊を相次いで寝返らせることに成功したことが挙げられるだろう。こうした寝返り工作を主として担っていたのが政治将校である。胡耀邦も山西軍閥・閻錫山が率いる軍部隊などに対する寝返り工作で、大きな功績を挙げていた。その際、閻錫山軍の陣営に送り込む寝返り工作員は、以下の三つのタイプから選ぶべきだと述べている。

……第一に、捕虜となった閩錫山軍の尉官クラスの将校である。もし毎日5人ずつ戻らせたとしても、一ヶ月でせいぜい150人に過ぎない。もしもこうした人々が戻ってから、また敵方についたとしたところで、一つの中隊くらいの人数に過ぎず、敵にいかほどの力も与えはしない。(中略) 仮にその中の何人かでも(筆者注:寝返らせるために)役割を果たしてくれば、その価値はより大きなものとなるだろう。第二に、利用可能な敵の親族や友人であり、例えば商人、女性、老人などに(筆者注:彼らからの)手紙を持たせて行かせるのである。こうした人々は敵に捕まって、部隊の兵士にさせられることもない。第三に、閩錫山軍の重傷を負った兵士であり、救助保護した後、何とかして送り返すのである。それでは我々が自ら面倒を求めるようなものだという者もあろうが、(筆者注:そういう者は)我々に求められるのが小さな面倒である一方で、敵に求められるのが大きな面倒だということを知らないのである(『胡耀邦(1915-1989)』第1巻133頁)。

胡耀邦というと、日本では民主化志向の政治改革を求めた総書記としての姿が独り歩きしている感があるが、戦場で謀略を巧みに駆使する政治将校としての一面があったことをも忘れてはならないだろう。

なお、胡耀邦は1945年9月に前線を一時的に離脱して北京に赴き、歴史的な中国人民政治協商会議に、中国新民主主義青年団(中国共産主義青年団が紆余曲折を経て1949年4月に改組)の正式代表の一人として参加した。同会議は新民主主義の下で、共産党と各党派・無党無派によって招集されたものであり、臨時の最高国家権力機関と見なされ、事実上の憲法に当たる「人民政治協商会議共同綱領」を採択した。同会議終了の翌日、10月1日に胡耀邦は中華人民共和国建国の大典に参列し、毛沢東らとともに天安門の楼上に立った。

土地改革

中華人民共和国が建国されたといっても、まだ共産党が中国全土を完全に掌握していたわけではなかった。そこで共産党は全国を東北、華北、西北、華東、中南、西南の6大行政区に分けて、それぞれの管轄地域で国民党軍の残党や匪賊の討伐を進めつつ、社会秩序の回復を図ることにした。西南は現在の四川省、雲南省、貴州省、重慶直轄市、チベット自治区を網羅しており、鄧小平が党中央西南局第一書記に就任してトップを務めていた。この時、胡耀邦は初めて鄧小平の直属の部下となり、四川省北部を管轄する川北区党委員会書記に就任して、同区のトップになっている。

胡耀邦は四川省北部において、党・政府・軍・財政の大権を有し、国民党軍の残党や匪賊を討伐したり、小作料引き下げを実施したりして、社会秩序の回復を図ると、いよいよ革命の本

丸とも言うべき土地改革に取り掛かった。共産党の革命の主要な任務は「反帝・反封建」であるとされてきた。「封建」は少数の地主に土地が集中していることを指し、「反封建」は土地改革、すなわち地主の土地を、実際に耕作に従事する小作農ら貧しい農民に分配して、自作農を創設することを指している。

しかし整風運動が康生の指導の下で、行き過ぎの様相を呈したように、土地改革もまた彼の指導の下で、同様の様相を示すようになった。共産党の工作隊の後押しで権力を握った貧しい農民たちが、地主や大規模農家だけでなく、すでに土地の分配を受けて中規模農家となっていた村の党幹部に対してさえも、激しい暴力を振るうようになったのである。

胡耀邦は、共産党に敵対的な地主に対しては決然と弾圧を命じる一方で、共産党に協力的な地主に対しては保護する方針をとっていた。しかし土地改革に関する報告書から、管轄下の地域で、地主という地主を虐待するばかりでなく、地主の未成年の子どもにまで迫害を加えるという事態が起きていることを知った。こうした事態に直面した胡耀邦は会議を招集して、以下のように強調している。

……土地改革を行なうとは、封建勢力と地主階級を消滅させることであって、地主分子の肉体を消滅させることではない。(中略) 地主の子どもに至っては、どの女のお腹に宿るか選びようがないではないか。彼らの出生のどこに罪があるのか? (『従紅小鬼到総書記』上巻146頁)。

こうしたことから明らかなように、胡耀邦は毛沢東を支える土着派の幹部ながら、康生(しばしば毛沢東自身)による過激な路線とは一線を画して、比較的穏健な路線を歩んでいたと言える。その背景には、自らが共産党支配の不条理な側面を、二度も身を以て体験したということがあっただろう。もっとも、胡耀邦が後年になって「解放の初期の川北工作の期間中に、いくつかの案件を決裁したが、後にでっちあげの事案であったことが証明された」と述べているように(『胡耀邦文選』98頁)、当時の風潮の中では、彼自身も行き過ぎに加担することを免れなかった。

青年工作

胡耀邦は1952年9月、北京に呼び戻されて、中国新民主主義青年団中央委員会書記に就任し、さらに57年5月には第一書記に昇格して(同年5月に中国共産主義青年団と改称。以後、共青团と略)、文化大革命で失脚するまでその地位にあった。文字通り青年工作の最高指導者となったのである。胡耀邦は元々一貫して青年工作に携わってきた。14歳で児童団の団長な

どになったのを皮切りに、長征の途上でも、延安でも青年工作に従事し、前述したように49年9月の中国政治協商会議にも中国新民主主義青年団の正式代表の一人として参加している。胡耀邦は60年にわたるキャリアの実に半分近くを青年工作のために費やしてきたのである。こうした経歴は高級幹部の中でも異色と言えるだろう。

胡耀邦は10年近く共青団のトップの座にあった間に、重要な人脈を築くことになる。後年、胡耀邦が総書記となった際に、頼みとしたのが以下のような共青団の関係者だったのである。副総理や外交部長などを歴任した呉学謙。党中央政治局常務委員などを歴任し、胡耀邦失脚後には一時、鄧小平から後継者として目されたことがありながらも、第二次天安門事件に際して、民主化を要求する学生らに同情的な立場をとったために失脚した胡啓立。胡耀邦と胡啓立失脚後も、改革派として江沢民政権下で党中央政治局常務委員などを歴任した李瑞環。そして鄧小平直々の指名によって、江沢民の次のトップとなった胡錦涛など。

胡耀邦は共青団のトップの座にあっただけに、青年の思想状況に関して独自の知見を有していた。胡耀邦の側近であった張黎群によれば、それは以下のようなものである。

……彼（筆者注：胡耀邦を指す）は次のように言った。青年は、社会経験が乏しく、情熱が有り余っていて、冷静さが不足しており、時には容易に感情が高ぶって、一方に偏ることを免れず、（中略）また時には熱しやすく冷めやすいという過ちを犯してしまうものだ。（中略）耀邦同志は次のようにも言った。「我々、入党してから長い年月が経ち、党の教育を数十年も受けてきた老幹部がなおもあれこれと過ちを犯しかねないのに、なぜ成長の過程にある青年に対して、かくも容赦なく手厳しいのだろうか。彼らに100パーセント成熟して、過ちを犯すなと求めるのだろうか？ これでは公正でなく、人心も得られないだろう」（『従紅小鬼到総書記』上巻236頁）。

胡耀邦が青年の思想状況に関して独自の知見を有するに至った背景には、どのようなことがあるだろうか。長きにわたって青年工作に携わってきたことはもとよりであるが、10代から20代にかけて「AB団」事件や整風運動を通して、共産党支配の不条理な側面を、身を以て体験したことがあるのではなかろうか。共産党は、過ち（甚だしきに至ってはでっち上げの過ち）を理由に「成長の過程にある青年に対して、かくも容赦なく手厳しい」弾圧や批判を行なって、青年が試行錯誤の末に自発的に過ちを改める（過ちがでっち上げだと証明する）猶予をほとんど与えてこなかった。こうした事態に対して、胡耀邦なりに検討を重ねた末に、独自の知見にたどり着いたのだろう。

なお後述するように、青年の思想状況に関するこうした知見の有無こそが、後年、胡耀邦と

鄧小平との間で、民主化運動への対応の相違をもたらす要因の一つとなった。胡耀邦は1986年末に、急進的な民主化の要求を突き付ける学生らの「過ち」を前にしても、寛大な姿勢を崩さなかった。一方、鄧小平は89年春に、同様な学生らの「過ち」を前にして、文化大革命中に自らに迫害を加えた紅衛兵の「過ち」と重ね合わせて、恐怖におののき、最終的に第二次天安門事件を引き起こすに至った。

もともと、1957年6月に反右派闘争が始まると、当時の胡耀邦は青年の思想状況に関する独自の知見を貫くことができずに、政治情勢に流されてしまうことになる。毛沢東は、反右派闘争に先立って、ソ連のスターリン批判（1956年のソ連共産党大会におけるフルシチョフ秘密報告を契機に起こったスターリンによる個人崇拜や大粛清などに対する批判）に伴う雪解けムードを受けて、56年から57年初頭にかけて、自由な発言を奨励する「百花斉放・百家争鳴」運動を展開するように指示した。胡耀邦も同運動を積極的に支持する態度を見せ、「われわれは反対意見のなかから合理的で有益なものを吸収し、自分の仕事を改善することを学びとらねばなりません」「われわれの組織にとって、反対や批判的な意見が耳に入らないことは、何らよいことではなく、かえってひじょう（原文ママ）に大きな危険でさえあります」などと述べていた（『中国の青年運動』48頁）。その結果、共青团傘下の新聞や雑誌の記者たちは臆することなく、官僚主義とその弊害を批判したり、社会悪を暴露したりする記事を書き、さらには全国各地で多くの学生が民主化と自由化を求めてデモを行なうに至った。

しかし、共産党批判の噴出に驚愕した毛沢東は、反批判、すなわち反右派闘争に踏み切った。こうして共青团内部でも反右派闘争が実施されることとなり、多くの記者や学生が右派とされた。右派と認定された人々は全体で55万人にも上り、その半数以上が公職や学校を追われて、農村で強制労働を強いられた。

胡耀邦は、共青团内での反右派闘争の拡大を、可能な限り食い止めようとしたものの、当時の風潮の下では自ずと限界があった。後年、胡耀邦自ら「共青团中央の工作の期間には、何人かの幹部に対する処分は適切ではなかった」と述べている。すなわち「決して反党反社会主義ではなく、ただ指導者に意見を提起し、党に対して腹藏なく話し、農村の実情を報告しただけの素晴らしい同志を、誤って右派に認定した」のである（『胡耀邦文選』98-99頁）。胡耀邦の青年の思想状況に関する知見に照らせば、たとえ正真正銘の右派の青年であっても、その青年に対して、試行錯誤の末に自発的に過ちを改める猶予を与えるべきだということになるだろう。しかし実際には、あろうことか右派とでっち上げられた青年に対してさえも、でっち上げだと証明する猶予を与えずに、即座に右派として処分を下さざるを得なかったのである。

大躍進運動

毛沢東はスターリン批判以来、ソ連とは距離を置き、独自の社会主義路線を模索するようになり、1958年から大躍進運動に着手した。同運動に当たって、発展途上国の中国であろうと、大衆を動員して人海戦術をとれば、農業や重工業は急速に発展するとして、15年でイギリスに追い付くという国家目標を掲げた。

中国政府は大躍進運動に先立って、1950年代前半より新民主主義の段階から社会主義の段階への移行を開始し、農業の集団化を推進することとした。農業の集団化とは、土地やその他の生産手段の所有権を各農家から集団に移すことである。集団化のレベルは20~30戸の農家から成る生産隊、10余りの生産隊から成る生産大隊、10くらいの生産大隊から成る人民公社に分類される。中国政府は集団化のレベルを一気に引き上げることとし、大躍進運動が始まる58年夏には人民公社が全国の農村に出現するに至った。人民公社は農業生産組織と末端の行政組織が一体化しており、政治・経済・文化・軍事を包含した機能を有し、農村における大躍進運動の実行単位とされた。

大躍進運動は中国に悲劇的な結末をもたらした。農業では、生産量が急減した結果、1959年から61年にかけて、中国全土で異常な食糧難が発生し、1600万から2700万の餓死者が出るに至った。この要因としては、農業生産力の客観的な限界を無視した諸政策や農民の生産意欲の減退などといった人災、並びに華北の旱害と華中・華南の水害といった天災を挙げることができる。一方、重工業でも、鉄鋼の生産運動に際して、中国在来の方法・技術が採用され、全国各地に旧式の小高炉が建設されて、多くの人々が動員されたものの、製品の大半は質が悪くて使い物にならなかった。

1959年8月に開催された廬山会議（8期8中全会）で、国防部長の彭徳懐らはついに大躍進運動に対する批判に踏み切った。それに対して毛沢東は、彭徳懐らの批判を自らへの批判ととらえて、彼らを「右翼日和見主義」であると決めつけた。毛沢東を恐れる他の参加者も同調したために、彭徳懐らは失脚の憂き目にあった。

反右派闘争以後、胡耀邦は失脚を恐れて慎重に振舞うようになり、前出の張黎群が指摘するように「時には本心にもとることを行なったり、言ったりせざるを得なくなっていた」が（『胡耀邦（1915-1989）』第1巻298頁）、廬山会議でも同様であった。秘書の高勇は後年、廬山会議での胡耀邦の様子を以下のように述べている。

胡耀邦は当時、調査にたくさん関わり、「大躍進」における多くの問題について、しかと理解していたことから、「彭徳懐と協力して党を攻撃する」気が起きないわけではなかった（筆者注：しかし結局のところそうしなかった）。その一方で、付和雷同（筆者注：

彭徳懷らへの批判に唱和することを指す)しなかったのも確かである。彼なりに考えがあって、廬山会議の会期中、ただグループ会で簡潔に態度表明をただけであり、その主な内容とは「主席の報告を支持する」「総路線、大躍進、人民公社の三つの旗印を支持する」といった類のものであった(高勇, 2016, 107頁)。

もっとも胡耀邦は毛沢東の歓心を得ることはできなかつたようである。高勇はその間の事情について以下のように述べている。

……胡耀邦の廬山会議での言動は、当然ながら「一切を見通す」毛沢東の目をすり抜けることができなかつた。毛沢東は毎日報告を聴いたり、報告の概要を読んだりして、全員の言動を明確に把握していた。毛沢東は、胡耀邦の簡潔な態度表明を目にした以外に、彼の意見を聴けなかつたことから、当然ながら彼に対して満足しなかつた。数年後、耀邦は毛沢東の自らに対する不満に感付いて、「廬山会議後、主席は1、2年もの間、私を相手にしようとせず、冷遇してきた」と言った(『胡耀邦(1915-1989)』第1巻306頁)。

調整政策

毛沢東は廬山会議を乗り切ったものの、さすがに1600万から2700万の餓死者の存在を前にしては、責任を免れることはできなかつた。毛沢東は1962年1月の七千人大会(党中央工作会議)において、大躍進運動の責任を部分的に認めて、自己批判を行なった。もっとも林彪が毛沢東をかばう発言をすると、それを称賛するなどしており、胸中においては大躍進運動の責任を、その一端であれ認めることを拒んでいたにちがいない。

七千人大会以後、毛沢東からナンバー2の劉少奇や鄧小平の手に実権が移り、両者の指導の下で経済再建のために、本格的な調整政策がとられることとなった。特に農業生産の回復に重点が置かれ、農業の集団化のレベルを引き下げて、生産隊を復活させることにした。さらに各農家が、政府に一定の収穫量を収めることを条件に、余剰の収穫物を自由に売却することができる制度(生産請負制)を事実上認めるなどの措置をとった。この制度はある程度まで市場経済化を容認することによって、農民の生産意欲を高めようとするものであり、改革開放以後、全国で一斉に展開されることになる。調整政策は功を奏し、農業生産は回復して、飢餓は解消されるに至った。鄧小平が「白い猫であれ、黒い猫であれ、ネズミを捕ればよい猫だ」という四川地方のことわざを引いて、農業生産の回復に役立つのならば、社会主義の原理原則にとらわれずに、柔軟に市場経済化を推し進めるべきだと暗に説いたのは、この頃のことである。

一方、毛沢東は、実権を掌握した劉少奇や鄧小平に対して不満を抱き、ひそかに反撃の機会

をうかがっていた。七千人大会から数か月後の62年9月に開催された8期10中全会において、「絶対に階級と階級闘争を忘れてはならない」という指示を出し、劉少奇や鄧小平の調整政策を資本主義の復活であると暗示した。この指示は「党内の資本主義の道を歩む一握りの実権派」、つまり劉少奇や鄧小平ら党内実権派の打倒を目指す文化大革命の出発点となった。

このように毛沢東と劉少奇らが水面下で対立を深める中で、胡耀邦はどのような態度をとっていたのだろうか。胡耀邦は1961年後半に河北省唐県の農村に視察に出かけた際に、人々の悲惨な境遇を目の当たりにしていた。そうしたこともあって、七千人大会以後、胡耀邦は劉少奇や鄧小平に従う態度を明確にとるようになる。1962年の初夏、胡耀邦は、当時開催されていた共青団の会議の出席者を5、6名自宅に招いたが、その際、居合わせた者によると、彼は以下のように語ったとのことである。

……胡耀邦は、七千人大会に皆が招集されて、真実について話し合ったということ述べた。彼は、この度の大会で党中央と毛主席が率先して過ちを認め、自己批判を行ない、指導上の責任を認めたと言った。その後、彼は私たちに次のように尋ねた。「君たち、ここ数年、党の威信は高くなっただろうか、それとも低くなっただろうか？」皆は一時黙り込んでしまった。胡耀邦は微笑んで、極まりが悪い重苦しさを吹き払おうとして、また次のように尋ねた。「君たちのうちで、誰があえて党の威信が低くなったと言ってくれるのかな？」彼は自問自答しておおよそ次のように言った。「私はあえて实事求是に則って、ここ数年、党の威信はかつてよりも低くなっていると言うよ」。『『苦しい日々を送って』餓死した者がこんなに増えたのは、主に『人災』によってもたらされたんだ。『五風（筆者注：官僚主義、強制的命令、でたらめな指導、大げさに言うやり方、全てを共同所有とするやり方）』を吹かせて、客観的な経済法則に背き、あれほど多くの馬鹿げたことを行なって、国民経済を崩壊の淵にまで追いやったのだ。心にもなく党の威信が高くなったなどと言えようか？（後略）」（『從紅小鬼到総書記』上巻233頁）

居合わせた人々が胡耀邦の問いかけに黙り込んだのは、当時の政治情勢の下では、たとえ私的な場であっても、毛沢東や党中央へのあからさまな批判を口外すれば、密告によって失脚を余儀なくされるリスクがあったからだと言える。胡耀邦は恐れることなく真実を語ったことから、その場に居合わせた誰もが尊敬の念にうたれたとのことである。

湖南省湘潭地区と陝西省のトップ

胡耀邦は、現場で農業生産の回復工作に当たることを希望して、1962年11月に故郷からほ

ど近い湖南省湘潭地区の党委員会第一書記を兼任することとなった。ちなみに第二書記は、毛沢東の死後、最高指導者になりながらも、鄧小平や胡耀邦らによって失脚を余儀なくされた華国鋒であった。また胡耀邦は65年5月には陝西省のトップである同省党委員会第一書記を兼任することとなった。劉少奇や鄧小平は、胡耀邦に地方行政の経験と実績を積ませるために、彼を陝西省に送り込んだのである。

胡耀邦が湘潭地区に赴任して間もなく、毛沢東は四清運動を発動した。同運動は、1963年から66年春にかけて一部の農村で展開された政治運動であり、文化大革命の先駆けとなった。当初は人民公社の労働点数、帳簿、倉庫、財産を再点検する（四点を清める）ことを主眼としていた。しかし運動の進め方をめぐって、劉少奇らと毛沢東との間で深刻な対立が生じるようになった。劉少奇らは、農村社会が混乱して、農業生産の回復に悪影響が及ぶことを恐れて、単なる農村の幹部の腐敗摘発運動にとどめようとしていた。

一方、毛沢東は、農業生産の回復にはお構いなしに、階級闘争という名の下で、大衆政治運動にエスカレートさせようとしていた。最終的に毛沢東は劉少奇らの反対を押し切ると、さらに強引に運動の内容を一変させてしまった。四清運動は、政治・経済・組織・思想を毛沢東の意向に沿ってつくり変える（四点を清める）ことを主眼とするようになり、打倒対象として、劉少奇や鄧小平らを暗に示す「党内の資本主義の道を歩む一握りの実権派」を掲げるに至ったのである。

胡耀邦は四清運動の最中においても、劉少奇や鄧小平を支持する立場を堅持している。湘潭地区では、農村の幹部は、大半が貧農の出身であり、かつ工作も骨折りが多かったことから、その一部は腐敗に手を染めてしまい、大衆の怒りを買っていた。胡耀邦は劉少奇らの主張に沿って、腐敗した幹部に対して、真摯に自己批判を行ない、横領したものを全て弁償するように求める一方で、大衆に対しては、階級闘争の名の下で、腐敗した幹部に虐待を加えることを禁止したのである。

また陝西省では、四清運動が毛沢東の意向に沿って展開され、他省よりも猛威を振るっていた。同省では失脚した彭徳懐や習仲勲（習近平国家主席の父親）などが長期にわたって指導していたことから、土地改革が徹底していないと見なされていたのである。胡耀邦は陝西省でも湘潭地区と同様に、運動の拡大を抑止しようと努めた。毛沢東が同運動の内容を一変させて、組織などを自らの意向に沿ってつくり変えようとした際には、胡耀邦は西安交通大学や人民解放軍の関係者に向かって、次のように反対の意を示唆している。「大学にどんな階級闘争があると言うのか？」「軍隊にどんな階級闘争があると言うのか？」「学校にも軍隊にも悪人は1パーセントもいない、せいぜい零点数パーセントだ」（『従紅小鬼到総書記』上巻285頁）。

ただし、ここで注意すべきなのは、胡耀邦は、毛沢東に対して批判的であり、劉少奇や鄧小

平を支持する立場を堅持していたものの、それは「毛沢東に対する修正とはいっても、反逆といったものではない」ということである（楊中美，1989，180頁）。胡耀邦は、毛沢東に対して批判的だったことを埋め合わせるかのように、「雷鋒に学べ運動」の口火を切る役割を果たしている。雷鋒（1940–62年）は湖南省の貧農の子であり、幼くして父母を亡くし、人民解放軍の兵士となり、若くして事故死した。死の翌年に、胡耀邦は共青团傘下の雑誌を用いて、毛沢東思想を体現した模範として、生前人民に奉仕して行なった数々の善行を宣伝し、「雷鋒に学べ」と提唱した。それが毛沢東の目に留まったことで、「雷鋒に学べ運動」は全国的に大々的に展開されるようになった。しかし改革開放以後には、雷鋒は個人崇拜に利用されたという批判が噴出して、同運動は下火になるに至った。

文化大革命

毛沢東はついに1966年夏、文化大革命の発動に踏み切った。文化大革命は毛沢東の死去まで、およそ10年間にわたって繰り広げられた熱狂的な大衆政治運動である。文化大革命は、前出の62年9月における「絶対に階級と階級闘争を忘れてはならない」という毛沢東の指示から出発し、四清運動を経て、「党内の資本主義の道を歩む一握りの実権派」、つまり劉少奇や鄧小平らの党内実権派を打倒するために発動された。

文化大革命の当初、先頭に立ったのは、全国の中学・高校・大学の学生らによって組織された紅衛兵である。紅衛兵は、熱狂的に「毛主席万岁！」と叫び、「造反有理（謀反には道理がある）」というスローガンの下で、党内実権派の指導者に迫害を加えた。さらに四旧（旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣）の打破を叫んで、文化財や書物を破壊したり、国有企業の管理職や知識人などに対しても迫害を加えたりした。しかしやがて各地の紅衛兵組織の間で、対立や内部抗争が勃発し、收拾がつかなくなったことから、毛沢東は政治秩序の回復に取り組み始めた。

この取り組みに応えたのが林彪である。国防相の林彪の指揮下にある人民解放軍が、紅衛兵によって党内実権派が一掃された後の空白を埋めるために、党と政府の各部門に進出して、秩序の回復を図ったのである。林彪は1969年4月の第9回党大会で副主席に選出され、党規約で毛沢東の後継者に定められた。紅衛兵は「上山下郷（山岳地帯や農村の民衆の中に入る）」運動の名の下に地方に追放されることとなった。

さて、胡耀邦は文化大革命の発動当時、共青团中央委員会第一書記と陝西省党委員会第一書記などのポストに就いていた。文化大革命が始まると、胡耀邦も劉少奇や鄧小平らに連なる党内実権派の一人として、紅衛兵の迫害の標的となった。

紅衛兵が党内実権派の指導者を迫害するに当たっては、反毛沢東思想や反革命の罪状を挙げ

る必要があったが、それがいかにこじつけに近いものであるかは、胡耀邦の例を見れば、明らかである。胡耀邦の側近であった李昌によれば、それは以下のようであった。

……1953年6月、共青团は第二回全国代表大会を開催して、胡耀邦が工作報告を行ない、李昌が共青团の規約改正の報告を行なった。両報告には「毛沢東思想」がなかった。改正された共青团の規約（草案）の原文には元来あった「毛沢東思想」が削除されていたのである。

しかし、それから13年後、「文革」での胡耀邦に対する批判闘争の際に、「造反派」は彼の工作報告から「毛沢東思想」の五文字が削除されたことを「反毛沢東思想」の確証として、彼に「正直に白状する」ように強いた（『従紅小鬼到総書記』上巻307頁）。

言うまでもなく、胡耀邦が自らの判断で、公的な報告から「毛沢東思想」を削除するなどあり得ないことである。批判闘争の場に、胡耀邦とともに引きずり出されていた李昌は助け舟を出して、「毛沢東思想」の削除の件については、毛沢東自らが指示したのだと言明した。李昌の勇気ある発言のおかげで、その日の胡耀邦に対する批判闘争は終了した。

しかしそれ以後も連日にわたって数か月もの間、全国各地から紅衛兵が入れ代わり立ち代わりやって来ては、胡耀邦を批判闘争の場に引きずり出した。ある時には、胡耀邦はしたたかに殴られ、腰部打撲となったものの、紅衛兵はそれに構わず、さらに批判闘争を続けようとしたために、とある女医が咄嗟に胡耀邦には心臓に持病があると偽って、彼を助け出したこともあった。

当時、胡耀邦に対して批判闘争を行なっていたとある紅衛兵によると、彼は質問に答える際には両目が鋭く生き生きとして、態度は丁寧で協力的に映ったものの、自らや他の幹部に対する迫害の口実となることは一切言わなかったそうである。胡耀邦は批判闘争の最中にもユーモアを失わず、他の幹部に次のようにアドバイスしていた。

……紅衛兵が批判闘争を行なう際には、二つの点に注意すべきだ。一つ目は、あらかじめ綿入れの上着を着て、両手をしっかり握ること。二つのグループの紅衛兵が引っ張り合いをする際に怪我をしたり、風邪をひいたりしないようにするためだ。二つ目は、必ず革靴を履くこと。混乱した状況下で両足を踏みつけられて痛めないようにするためだ。他の靴を履いたって駄目だね（同上309頁）。

批判闘争に耐えかねた幹部の中には、自死を選ぶ者さえ数多いた中で、胡耀邦は何とか精神

の余裕を失わずに、持ちこたえていたと言えるだろう。しかしながら時には胡耀邦でさえも音を上げて、迫害の口実となる「証拠資料の作成に際して、二、三の同志について事実とは異なることを話した」と後年に至って告白している（『胡耀邦文選』98頁）。批判闘争の過酷さがうかがわれるだろう。

胡耀邦は1969年5月に河南省潢川県黄湖の農場に設置された「五・七幹部学校」に送られ、労働改造されることになった。「五・七幹部学校」とは、幹部が農村で労働に従事して政治意識を高め、官僚主義・教条主義的作風を改めることを目的として開設された農場である。66年5月7日付けの毛沢東の林彪宛ての書簡にあった「全国を革命化した大きな学校にしよう」という指示の精神に基づき、黒竜江省革命委員会が同省慶安県柳河の農村に開設したのを端緒として、急速に全国各地に広がったものである。胡耀邦は「五・七幹部学校」で病弱な身体をおして重労働に従事した挙句、ついに病に倒れ、71年末に北京で治療を受けることを許されるようになった。その後も75年7月に復活して公職に就くまでの3年余りの間、北京の自宅で療養生活を送ることを認められ、読書をしたり、中国の今後の行く末についてひそかに思索を巡らせたりすることができた。その間、田中角栄元首相の『列島改造論』などを読みながら、「日本の経験は我々の手本になる」などと考えていた（『胡耀邦（1915-1989）』第2巻422頁）。

III. 総書記：民主化志向の政治改革とその挫折

中国科学院副院長

胡耀邦が鄧小平とともに復活するきっかけとなったのは、中国内外を震撼させた林彪事件の発生である。林彪は前述したように、文化大革命の発動後、失脚した劉少奇に代わってナンバー2となり、1969年4月の第9回党大会で毛沢東の後継者に正式に指名された。しかしわずか2年余り後の71年9月に、林彪は、毛沢東暗殺クーデターを企てて失敗した挙句、当時中国と対立していたソ連へ空軍機で妻子とともに亡命しようとした最中に、モンゴル上空で墜落死を遂げた。

鄧小平は、文化大革命が発動されると、劉少奇とともに真っ先に打倒の対象とされたものの、党籍剥奪の末に死に至らしめられた劉少奇とは異なり、何とか党籍留保は認められて、トラクター工場で労働に従事させられていた。林彪事件後、毛沢東夫人・江青ら四人組への権力集中が顕著になったことから、毛沢東は警戒を強め、バランスを保つために、周恩来の実務権限を強め、さらには鄧小平を復活させることにした。こうして鄧小平は1973年3月に國務院副総理となって、劇的な復活を果たした。胡耀邦も75年7月に復活して、中国科学院副院長に就任した。復活した鄧小平は、文化大革命からの脱却を目指して、周恩来によって提唱され

た「四つの現代化（農業・工業・国防・科学技術の近代化）」を推し進め、生産力の発展を重視する政策に舵を切ろうと試みた。そしてその一環として、胡耀邦に「科学院工作報告提綱」をまとめさせた。

しかし、鄧小平と胡耀邦のこうした試みは、毛沢東や四人組の反撃に遭うことになる。鄧小平は1976年4月に起こった第一次天安門事件の黒幕とされて、再度の失脚を余儀なくされた。第一次天安門事件とは、同年1月に周恩来が死去し、周恩来や鄧小平の路線を支持する北京の民衆が、四人組への反発を強めて、4月に天安門で大規模な周恩来追悼集会を開いたところ、四人組一派が弾圧を強行したというものである。

胡耀邦もまた1975年11月に「科学院工作報告提綱」が他の二つの文献とともに「三大毒草の一つ」とされて、中国科学院の職務の停止処分を受けた。そして再び四人組一派によって、批判闘争の場に引きずり出されるようになった。ここで、胡耀邦の中国科学院における活動を、四人組一派がどのように批判していたかを見ることにしよう。76年2月に『人民日報』紙上で以下のような胡耀邦に対する批判記事が掲載されている。

……数か月前、科学・技術界で右からの巻き返しの動きが出てきた時に、その主唱者の一人（筆者注：胡耀邦を指す）が我々の部門にやって来て、長話をしていった。その際、一言も階級闘争について語らず、党の基本路線についても話題に出さず、「科学研究の工作を行なう」という名目を使って、平然と修正主義の代物を売りさばっていた。彼は「現在、我々の科学・技術は危機にある」「ここ数年、いささか盲目的に自力更生を重視してきた」などとでたらめを言っていた。（中略）彼はただ外国の専門家に頼るだけで、彼のいわゆる危機を解決し得ると考えている。すなわちただ他人の後を一步一步這って進むだけで、「盲目」でなくなると見なしているのである。科学・技術戦線の広範な労働者、科学研究のスタッフ、幹部が毛主席の革命路線の指導の下で、ほとぼしらせている社会的な積極性や創造性を、彼ら（筆者注：胡耀邦らを指す）は全く顧慮していないのである（「駁“今不如昔”論」）。

四人組一派の批判から、胡耀邦が中国科学院において目指していたものが浮き彫りになるだろう。「階級闘争」や「党の基本路線」、すなわち文化大革命を継続することなどではなく、「外国の専門家」、すなわち先進国・地域の専門家を通して、先端の科学・技術を習得することを目指していたのである。これはその後、改革開放が始まると同時に、すぐさま実行に移されている。しかし毛沢東が存命で、四人組が一扫されていない当時にとっては「修正主義」、すなわち「自力更生」を重視する毛沢東思想の裏切りを意味していたのである。

真理の基準論争

1976年9月9日、毛沢東がついに死去した。毛沢東の死後、党中央における権力闘争は一段と激化した。四人組の中心である江青は、党主席ポストを獲得しようと画策したが、党第一副主席兼首相の華国鋒が同年10月、葉劍英らの力を借りて先手を打ち、四人組の逮捕に踏み切った。華国鋒は、文化大革命を急進的に推進した四人組とは一線を画して、穏健派に属していた。華国鋒はその後、党主席と中央軍事委員会主席を兼職して、最高指導者となった。

華国鋒は、文化大革命の発動後に、毛沢東に見出されて急速に頭角を現し、党中央や中央政府のポストを一気に駆け上がってきた。前述したように、胡耀邦が1962年11月に湖南省湘潭地区党委員会第一書記を兼任することとなった際には、華国鋒は第二書記を務めており、文化大革命の発動前には、一地方官僚に過ぎなかったのである。それだけに華国鋒には党中央において確固とした支持基盤がない状態だった。

華国鋒は、自らの権力の正統性を印象付け、支持基盤を固めるために、しばしば毛沢東の「あなたがやってくれば、私は安心だ」という「遺言」を示して、毛沢東によって直々に選ばれた後継者であることを強調していた。そのために必然的に毛沢東路線を継承せざるを得なくなり、「二つのすべて（毛沢東の決定を全て守り、毛沢東の指示を全て守る）」と呼ばれる方針を提起した。こうして華国鋒の下では、文化大革命の清算が徹底的になされ得ないことが明らかとなった。

一方、四人組の逮捕後、復活した高級幹部を中心に、鄧小平の復活を待望する声が増しに強くなってきた。当初は華国鋒も鄧小平の復活に難色を示していたものの、鄧小平が華国鋒に書簡を送り、華国鋒の指導を絶賛し、自己の誤りを反省していることを伝えたことから、ついに復活を認めることにした。1977年7月、鄧小平は党副主席、國務院副総理、中央軍事委員会副主席兼総参謀長に復帰し、華国鋒、葉劍英に次ぐナンバー3の地位を確保した。胡耀邦もまた同年中に中央党校副校長、さらには党中央組織部長となった。

鄧小平は復活直後から華国鋒の打倒を目論んでいたが、胡耀邦がその先鞭を付けることとなる。現代中国における権力闘争は、しばしばイデオロギー闘争の形をとるが、この場合もそうであった。胡耀邦は中央党校のスタッフを動員して、華国鋒が掲げる「二つの全て」に対抗して、1978年5月に「実践は真理を検証する唯一の基準である」という論文を発表させた。その論文の一節を以下に引用することにしよう。

……マルクス主義は、実践が真理を検証する基準であり、実践の最中における真理の認識が永遠に完成することはないと強調している。すなわち我々の認識が一度で完成したり、究極的に完成したりしないことを認めているのである。また歴史的かつ階級的な限界が

ら、我々の認識が誤りを犯しかねないことを認めているのである。そこで実践によって検証することが必要になってくる。およそ実践を経て、誤っていると、あるいは現実に合わないと証明されたものについては、改めるべきであって、守り抜くべきではない。(中略)毛主席も次のように述べている。「真の革命指導者は、自らの思想、理論、計画、プランに誤りがあった時には、適切に改めなければならない(中略)」。

……マルクス・レーニン主義と毛沢東思想の既成の条文の上にあぐらをかき、甚だしきに至っては、既成の公式によって、無限に豊かで、速やかに発展している革命の実践を制限したり、抑圧したり、裁断したりしてきたが、こうした態度は誤りである(「実践は検証 真理的唯一標準」)。

このように一見すると哲学の論文のような装いをしているが、巧みに毛沢東の著作から引用しながら、華国鋒によって掲げられた「二つの全て」という方針を暗に批判する内容となっている。すなわち以下のようなことを言わんとしていたのである。「二つの全て」という方針は、毛沢東に限っては、例外的に「実践の最中における真理の認識が永遠に完成する」と見なすという誤りを犯してきた。それ故に「毛沢東思想の既成の条文の上にあぐらをかき、さらに甚だしきに至っては、既成の公式によって(中略)革命の実践を制限したり、抑圧したり、裁断したりしてきた」のであると。要するに毛沢東思想についても、改めて実践によって真理にかなっているか否かを検証すべきであって、金科玉条としてはならないと主張したのである。

華国鋒打倒に当たっての胡耀邦の貢献は、イデオロギー闘争だけではなかった。党中央組織部長として尽力した数多の冤罪の掘り起こしと名誉回復も、結果的に鄧小平を援護することにつながっている。胡耀邦は1950年代までさかのぼって、失脚した幹部や党員の名誉回復のために尽力したが、その人数は290万人にも上った。かつての劉少奇や鄧小平ら党内実権派に連なる高級幹部たちが復活すると、鄧小平の強力な援軍になったのである。鄧小平は胡耀邦のこうした働きのお陰で、78年末の11期3中全会で、華国鋒に勝利を収めることに成功した。勝利に大きく貢献した胡耀邦は党中央政治局員に選出されている。

11期3中全会では、鄧小平の勝利を反映して、次の三点が決議された。①「二つの全て」が批判され、「実践は真理を検証する唯一の基準である」が高く評価された。②毛沢東によって唱えられた階級闘争を重視するといった方針が否定され、近代化路線、とりわけ農業を中心とする経済の発展に重点を置くという方針が確認された。③1976年4月の第一次天安門事件は四人組に反対する大衆の革命的行動であったと認められて、関係者の名誉回復が行なわれた。

また1981年6月の11期6中全会では、毛沢東時代を総括する歴史決議が採択された。文化大革命を「指導者が間違っ

大きな災難をもたらした内乱」であると規定して、全面的に否定した。一方、毛沢東については「文化大革命で重大な誤りを犯したとはいえ、中国革命に対する功績は、誤りをはるかにしのいでいる」といった評価を下した。

1982年9月の第12回党大会では、華国鋒をはじめとする文化大革命派が指導部から一掃されて、鄧小平時代が本格的に幕開けすることになった。しかしすでに78歳という高齢に達していた鄧小平は、華国鋒が占めていた職責の中、中央軍事委員会主席に就任しただけで、党のトップ（主席が廃止され、総書記が新たに設置された）は胡耀邦に任せ、國務院総理（首相）は趙紫陽に任せることとした。こうしていわゆる「鄧胡趙トロイカ体制」が確立し、胡耀邦は鄧小平の後継者と目されるようになる。

改革開放

「鄧胡趙トロイカ体制」は経済発展、ひいては「四つの現代化」のために、改革開放と呼ばれる一連の経済改革に取り組むこととなった。人民公社の解体や経済特別区の設置などが行われ、市場経済化が推進されたのである。

人民公社の解体は、生産請負制の本格的な導入に伴って実施に移された。農家の生産意欲を刺激して、農業生産を高めるために、生産請負制（各農家が政府に対して一定の収穫量を収めることを条件に、余剰の収穫物については自由に売却することができる制度）が全国各地に導入されることとなった。生産請負制は、前述したように、大躍進運動後の一時期、劉少奇や鄧小平の下で事実上黙認され、後に毛沢東によって厳しい批判を浴びる結果となったが、文化大革命の終了後、安徽省などで先行的に再試行されて、その効果に改めて注目が集まっていたのである。人民公社は1982年になると正式に解体されることが決まり、行政機能のみが郷人民政府に移されることになった。

一方、経済特別区の設置は、外資と先端技術の導入を目的として実施に移された。1979年に広東省と福建省に設置された四つの経済特別区、すなわち深圳、珠海、汕頭、厦門はそれぞれ香港資本、マカオ資本、華僑資本、台湾資本の導入窓口になることを期待されていた。さらに84年には沿海の14都市（大連、天津、青島、上海、寧波、温州、福州、広州など）が沿海開放都市として認定された。

こうした「鄧胡趙トロイカ体制」が推し進める改革開放に対して、党内の保守派は反発を隠さなかった。保守派は、生産請負制の下で成功を収めた農村の万元戸を批判し、経済特別区をかつての租界と変わらぬと批判していた。また当時、保守派の長老格の陳雲は経済改革にブレーキをかけるために「鳥籠経済論」を提起していた。「鳥籠経済論」とは、鳥を市場経済に、鳥籠を計画経済に、それぞれなぞらえた上で、鳥が鳥籠の中でしか生きられないように、市場

経済の導入はあくまでも計画経済の枠内にとどめるべきだという主張である。後述するように、鄧小平は保守派の反発に対して、政治改革では妥協する代わりに、改革開放では断固として意志を貫く姿勢を見せていた。

チベット問題

胡耀邦は改革開放を推進するかたわら、チベット問題にも積極的に取り組む姿勢を見せていた。文化大革命中、チベット自治区では、漢族出身で同自治区党委員会第一書記の任榮の指導の下で、チベット族の伝統文化とチベット仏教の信仰生活が完膚なきまでに破壊され、経済が壊滅させられて、多くの地方で飢饉が発生していた。胡耀邦は1980年5月にチベットを視察に訪れ、党のこれまでの対チベット政策の過ちを認めるとともに、チベットにおける最大の問題が貧困であると認識するようになった。そして新たな対チベット政策を打ち出した。例えば、人事を一新して、任榮を更迭し、チベット族の幹部を大量に抜擢したほか、自治権を拡大して、チベットの実情に適した経済政策や文化教育政策を実施しようと試みたのである。

胡耀邦はこうした新たな対チベット政策を打ち出すことによって、チベット仏教の教主にして、チベット解放運動の指導者でもあるダライ・ラマ14世の信用を勝ち得た。ダライ・ラマ14世は自伝で以下のように述べている。

……わたしは、チベットにおける中国側の数々の過ちを認めた彼（筆者注：胡耀邦を指す）の勇気には、大いに感謝している。彼のその態度は、中国指導者内部にさえ、外国（筆者注：チベットを指す）に対する抑圧政策を支持しない人間がいた明白な証拠となるからである（ダライ・ラマ、2009、359頁）。

しかし保守派からは批判を浴び、例えば鄧力群は、胡耀邦がチベット問題を処理する際に、二つの過ちを犯したと批判している。第一に「帝国主義が中国を分裂させるといった大問題に対して警戒心をもっていない」ということである。近現代において英国やインドがチベットを狙っていたということ、胡耀邦は知らないのか、もしくは重視していないかのどちらかだろうとしている。第二に「民族地区における民族分裂主義の危険性を認識していない」ということである。胡耀邦はチベットにおける「『左』の危険性」、すなわち文化大革命の影響の危険性を一掃しようとするばかりで、ダライ・ラマ14世に象徴される民族分裂主義の危険性については全く念頭にないようだとしている（鄧力群、2006、208-209頁）。

胡耀邦が死去する直前の1989年3月にチベット自治区の首府ラサで、チベット独立を求めるデモ隊と公安・警察が衝突した。ラサには同自治区政府によって、建国以来初となる戒厳令

が布告され、チベット族に対する徹底した弾圧が行なわれた。ちなみにその当時の同自治区のトップである党書記は、胡耀邦が頼みとした共青团人脈に連なる胡錦濤であった。皮肉なことに、胡錦濤は、胡耀邦の新たな対チベット政策を白紙に戻して、上記のような鄧力群の批判に同調したと言ってよいだろう。胡錦濤のラサでの措置は、鄧小平からも高く評価されるに至った。胡錦濤が江沢民の後継者の地位を射止めることができたのも、そのためであると言われている。

鄧小平にとっての政治改革

さて、「鄧胡趙トロイカ体制」は、経済改革を進めるのと軌を一にして、政治改革についても模索を始めていた。口火を切ったのは鄧小平である。1980年8月に鄧小平は「党と国家の指導制度改革について」という談話を発表した。それは次のような内容から成っていた。①権力の過度の集中を排して、社会主義民主と民主集中制を実行しやすくする。②兼職・副職を整理して、官僚主義と形式主義を克服し、効率化をはかる。③党と行政の分離を行ない、中央の一部の指導者は政府の職務を兼任せずに、党の路線・方針・政策の管理に集中する。④長期的視点に立って、後継者問題の解決を図り、老同志の第一の任務は、比較的若い同志に第一線を譲り、自らはその参謀になることとする。鄧小平の談話を機に、知識人の間では活発に政治改革の議論が交わされるようになった。

上記の四点の中、最も注目に値するのは③の党と行政の分離であろう。仮に③を徹底させれば、党が政府を全面的に指導するという原則が崩れることになるからである。そこで鄧小平は政治改革の提起に先立って、「四つの原則（①社会主義の道の堅持、②プロレタリア独裁の堅持、③共産党の指導の堅持、④マルクス・レーニン主義と毛沢東思想の堅持）」を打ち出すことで、政治改革の限界点を明らかにした。政治改革はあくまでも党の指導を弱体化させないことが大前提だったのである。

鄧小平が「四つの原則」を提起した背景には、どのような事情があったのだろうか。1978年秋から翌春にかけて、第一次天安門事件の関係者らは名誉回復に力を得て、「北京の春」と呼ばれる民主化運動を繰り広げていた。彼らは、北京の西単にあった「民主の壁」に壁新聞を貼り出し、翌年には雑誌「探索」などを発行した。彼らは壁新聞や雑誌で、中国政府が掲げた「四つの現代化」に、民主化という「第五の現代化」をも追加すべきであると主張した。しかし中心的リーダーの魏京生が鄧小平を名指して批判して逮捕されたのを機に、「北京の春」は終息に向かうことになる。鄧小平はその際、「四つの原則」を掲げることで、民主化を絶対に認めないという意思を明確に示したのである²⁾。

そもそも鄧小平が政治改革を唱えたのは、改革開放を円滑に進めるためであった。鄧小平に

としては、改革開放こそが主たる目的であり、政治改革はそのための手段の一つでしかなかったのである。極論すれば、政治改革を推進しなくても、改革開放が進捗するのであれば、政治改革は推進しなくても構わないということになるだろう。

それ故に鄧小平は、保守派が改革開放や政治改革に対して批判の声を上げると、改革開放については、断固として意志を貫く姿勢を見せても、政治改革、特に党と行政の分離については、あっさりとして妥協して棚上げするようになる。保守派は政治改革そのものに対して疑問を抱き、かつ党の指導のさらなる強化を主張していたが、当時、鄧小平は保守派との間で、少なくとも党の指導の堅持という点では見解をほぼ同じくしており、妥協は比較的容易だったのである。矢吹晋の言葉を借りるのならば、「鄧小平は経済改革派・政治保守派の『二つの顔』を使いわけて陣頭指揮をしている」のであった（矢吹晋，2003，123頁）。

胡耀邦にとっての政治改革

一方、胡耀邦は、政治改革を文化大革命の再来を防ぐという観点から捉えており、政治改革それ自体を改革開放と同様に主たる目的と位置付けていた。それは、胡耀邦とイタリア共産党の訪中国との会談に立ち会った当時の通訳の回想からも見出すことができよう。胡耀邦がイタリア共産党の訪中国に語った内容は以下の通りである。

……「文革」という災難を防止するには、党と国家の制度から方策を講じて、民主を發展させ、健全化させなければならない。（中略）林彪や「四人組」は野心家であり、陰謀家であるが、彼らの悪辣さは、生来のものではなく、中国の古い搾取階級から学んだものである。中国における旧社会の痕跡は長期にわたって存在するだろう。問題は、野心家や個人主義者が党の方向性を変えることを、いかにして防止するかということである。これについては、我が党と国家の制度から方策を講じるべきである。（中略）単に「四つの現代化」によって党の今後20年に及ぶ任務を総括するだけでは「全然足りない」。精力を集中させて建設を行なうのと同時に、我々はさらに「現代化・高度の民主・高度の文明の社会主義強国を建設する」といった壮大な目標を提起すべきである（張治宇，2006，37頁）。

改革開放は究極的には「四つの現代化」を実現するために着手されたのであるが、胡耀邦はそれだけでは「全然足りない」として、「高度の民主」をも実現すべきだとしている。すなわち政治改革をも推し進めるべきだとしているのである。それは、林彪や「四人組」（言外に毛沢東をも含めているだろうが）のような「野心家」が共産党を乗っ取って、「文革」を再び引き起こすことを防ぐためである。

では「高度の民主」とはそもそも何を指しているのだろうか。「高度の民主」は決して西欧流の民主主義を指しているわけではない。胡耀邦は1982年9月の第12回党大会での報告で、「社会主義民主は資産階級民主にはなぞらえようがない」と主張していたのである（「全面開創社会主義現代化建設的新局面」33頁）。「高度の民主」が新民主主義を指しているとは指摘するのは、前出の胡績偉である。胡績偉によれば、「当時、于光遠が新民主主義社会の建設に関する大綱を執筆したが、（中略）後日、胡耀邦が彼に電話をかけて一時間余り話した際に、大綱に賛意を示した」とのことである（李銳ほか、2009、46頁）。

新民主主義とは、前述したように1940年代から50年代初めにかけて毛沢東が提唱した社会主義に至る過渡期の段階である。新民主主義の段階では、プロレタリアートの指導の下で、農民のほか、民族ブルジョアジー、プチブルジョアジーを含めた諸階級の連合独裁を想定していた。換言すれば、国民党を除く共産党と各党各派・無党無派が、民主的な連合政府を樹立すべきだとしたのである。

新民主主義は、共産党が権力を独占しないように自己抑制することを骨子にしていると言えるだろうが、それはまさに党と行政を分離することにほかならないだろう。実際、胡耀邦は、鄧小平が党と行政の分離を事実上棚上げするようになって、あえてそれに固執する姿勢を示していた。胡耀邦は第12回党大会での報告で、以下のように述べている。

政府機構に対する党の指導（中略）の問題を正しく解決することは、機構改革における極めて重要な問題となっている。党の工作と政府の工作（中略）は適切に分担されるべきである。党は、大衆に対して権威を傘にあれこれ指図する権力組織ではなく、また行政組織（中略）でもない（「全面開創社会主義現代化建設的新局面」54頁）。

さらに胡績偉は1980年代における新民主主義の特徴について、次のように指摘している。①共産党の指導を認める。②軍隊は国家ではなく、共産党が擁する。③経済は公有制を主とする。④共産党の指導の下で漸進的に思想や言論の自由を拡大する（李銳ほか、2009、46頁）。胡績偉の定義に従えば、新民主主義のメルクマールはまさに④の思想や言論の自由の漸進的な拡大になるだろう。実際、後述するように、胡耀邦はそのために矢面に立つことを厭わなかったのである。

鄧小平との対立と失脚

思想や言論の自由の漸進的な拡大を認めるか否かということが、まさしく胡耀邦と鄧小平の亀裂の起点となっている。胡績偉の言葉を借りるのならば、胡耀邦の「自由民主の路線」と鄧

小平の「独裁独占の路線」との間で対立が起こったのである。保守派も当然のことながら「独裁独占の路線」を支持して、「自由民主の路線」を胡耀邦もろとも潰し、さらにはあわよくば改革開放をも骨抜きにしようと画策していた。

保守派によって1983年から翌年にかけて反「精神汚染」キャンペーンが繰り広げられた際には、民主化を志向する知識人によって提起された理論のみならず、ジーンズやディスコ、女性のパーマまでもが「ブルジョア自由化」の現象と見なされ、批判の対象になった。この時には、改革開放にまで影響が出ることを恐れた鄧小平の支持の下に、胡耀邦は何とかキャンペーンを収束させることに成功した。

胡耀邦が矢面に立って、思想や言論の自由を守ろうとしたことから、彼は民主化を求める知識人や学生の間で声望が高まっていった。海外に活動拠点を置く急進的な民主化運動の活動家さえも、胡耀邦との間に民主化をめぐる考え方に相違点があることを認識しつつも、胡耀邦支持を鮮明にしていた。その活動家は、胡耀邦ら改革派と保守派との間でバランスを保っていた鄧小平が死去すれば、両派の間で死闘が起こるだろうと予測した上で、改革派を支持する理由について以下のように述べている。

改革派と保守派との間で生きるか死ぬかの闘争が起こるにちがいないという情勢に直面した際に、我々民主派はどうすべきだろうか？

こうした民族の命運に危険が差し迫っている時において、我々民主派は、積極的に改革派を支持して、保守派の復位の企てに打撃を与えるべきである。(中略)我々が改革派に対して積極的に手助けしようとするのは、次のような判断に基づいている。もしも保守派の復位が成功すれば、中国社会には大きな後退や災害が起こり、数百万、数千万の人民の頭が地面に叩きつけられて、長年にわたる改革の成果は、一朝にして無に帰すだろう。(中略)我々は中共改革派にも多くの不満を抱いているが、我々民主化運動の利益と民族のそれとが一致していることから、我々は先入観を捨てて、改革派を支持し、保守派に打撃を与えるという決定を下すのである(李国愚, 1985, 104-105頁)。

1986年に入ると、鄧小平は再び改革開放を円滑に進めるために政治改革を提起するに至り、これを機に知識人の間では、再び政治改革に関する議論が起こった。しかし保守派が巻き返しを図ると、鄧小平は再び妥協に傾き、同年9月の12期6中全会で「ブルジョア自由化」に対する徹底的な反対を打ち出した。これに反発して、まず安徽省合肥の中国科学技術大学の学生がデモの口火を切った。同大学の学生は、著名な天文学物理学者にして、急進改革派でもあった学長の方励之の影響を受けていたのである。それから瞬く間に中国各地の学生が民主化を求め

てデモを行なうようになった。

保守派はもとより鄧小平も、学生の民主化要求を「ブルジョア自由化」と見なして、弾圧をも辞さない構えを見せていた。一方、胡耀邦は学生のデモに対して「何もたいしたことではない」と見なしていた。というのは「一部の青年は騙されているのであって、教育を受ければ、目覚めるだろう」から。それどころかデモの「騒ぎの一部は正しいのだ、というのは、私たち自身にも官僚主義があるのだから」などと言って、デモを肯定的に見てさえいたのである（満妹、2011、462頁）。胡耀邦はついに鄧小平の逆鱗に触れてしまい、翌87年1月に自ら総書記の辞任を申し入れるに至った。

学生デモへの対応の相違の要因

ここで、胡耀邦と鄧小平との間で、学生デモに対して対応が大きく異なった要因について、改めて検討することにしよう。要因の一つとして、前述したような両者の政治改革に対する考え方の相違を挙げることができるだろう。胡耀邦は政治改革自体を主たる目的として、思想や言論の自由の漸進的な拡大を図ろうとしていた。一方、鄧小平は政治改革を、あくまでも改革開放を円滑に進めるための手段の一つとしてしか捉えておらず、思想や言論の自由の漸進的な拡大を「ブルジョア自由化」として否定していた。

また別の要因としては、前述したように、両者の青年の思想状況に関する知見の相違を挙げることができるだろう。胡耀邦の娘の満妹によれば、彼は紅衛兵によって迫害を被った後でさえ、以下の発言に見られるように、青年の思想的な過ちには終始寛大であった。

生気に満ち溢れて、前進している最中に過ちを犯す者は、実際のところ横になって動かないような者よりも百倍も抜きんできていると言うべきである。というのは、前者は過ちを犯しながらも、成長し成熟し、そこから一定の真理を発掘し発見しつつあると、はっきり言うことができるからである。一方、後者は実際のところ社会の前進を阻害し、皆を引きずり込んで動かないようにさせているのである（満妹、2011、465頁）。

上記の言葉を敷衍するのならば、たとえ思想的な過ちを犯そうとも、デモに参加する青年の方が、当局の取り締まりを恐れて、何もしない青年よりも「百倍も抜きんできている」と、胡耀邦が考えたとしてもおかしくないだろう。前述したように、胡耀邦によれば、元来「青年は、社会経験が乏しく、情熱が有り余っていて、冷静さが不足しており、時には容易に感情が高ぶって、一方に偏ることを免れ」ない存在である。それ故に、文化大革命に際しては「左」に偏り、紅衛兵となって党の幹部を迫害するに至り、改革開放に際しては「右」に偏り、急進的

な民主化の要求を党の幹部に突き付けるに至るのである。しかし青年を善導することができさえすれば、きっと「左」にも「右」にも偏らず、中庸の道を歩ませることができにちがいない。要するに胡耀邦は青年全般を根底的に信頼していたのである。満妹もその点について、胡耀邦が「青年に対して常に大いなる希望を抱いていた」と述べている（同上463頁）。

一方、鄧小平は、デモに参加する学生を、かつて自らを迫害した紅衛兵と重ね合わせて、恐怖におのぎ、弾圧を要求していた。鄧小平にとって、「左」であれ、「右」であれ、思想的な過ちを犯した青年の集団ほど恐ろしいものはなく、善導する余地などないと考えていたと言えるだろう。

失脚から死去まで

胡耀邦は自ら総書記の辞任を申し入れたものの、連日にわたって会議の場で、趙紫陽を含む高級幹部から批判を浴びせられた。ちなみに胡耀邦のその他の過ちとして、少数民族や対日外交に絡んだ問題なども挙げられていた。すなわち、チベット自治区訪問に際して、漢族の幹部を批判したことで、チベット族と漢族の矛盾を激化させたこと、並びに党中央に無断で中曽根首相を招待したり、三千人の日本青年を招待したりしたことである（和気弘，1987，12-13頁）。

唯一胡耀邦をかばった高級幹部は、習近平国家主席の父親の習仲勲のみだった。習仲勲は、胡耀邦失脚の手続きが党規に違反していると批判した。一方、胡耀邦自身は抗弁することなく、批判を受け容れて、自己批判を行なった。荒井利明は、胡耀邦が自ら辞任し、かつ自己批判まで行なったのは、家族や側近を守るためであったと推測している（荒井利明，2011，292頁）。実際、冒頭で述べたように、自己批判を拒んだ趙紫陽は終生にわたって軟禁され、その側近やブレインは逮捕されたり、亡命を余儀なくされたりしている。

前出の張黎群によれば、辞任直後の胡耀邦の様子は「顔色があまりよくなく、いささかやつれ、鬱屈した心境は隠しようがなかったが、依然として落ち着き払い、両目は鋭く生き生きとしていた」。胡耀邦は張黎群に、批判を真摯に受け止め、自らの言動を記録した文書類を子細に検討することにしたと語った。三か月後、張黎群が再度訪れた際、胡耀邦は「党と人民の信任と依託に対してやましい点はない」と断言するに至った（張黎群，2000，22頁）。すなわち鄧小平をはじめとする高級幹部らによる批判は不当であり、総書記の辞任も自己批判も不本意だと考えていたのである。

胡耀邦は自己批判を行なったため、総書記を辞任しても、中央政治局員の地位を保つことができた。しかし1988年の旧正月明けに、側近の邢方群が訪れた際、胡耀邦は総書記辞任後、すでに官職を辞したのも同然だと明かしている。無論のこと中央政治局員として会議に参加す

る義務はあったが、一切発言せずに、「党の決定に従い、党の団結を守る」という態度を貫くことにしたと述べている（同上24頁）。それ故、自らの後を引き継いで総書記となった趙紫陽が、鄧小平の支持の下に、87年秋の第13回党大会で提起した党と行政の分離をも含む政治改革の綱領を積極的に擁護することもなければ、胡耀邦に続いて趙紫陽の失脚をも狙う保守派を批判することもなかったのである。

胡耀邦は自らの名誉回復についても恬淡としていた。死去する10日前に李鋭に会った際にも、「もし中央が私に実際に合致した結論を出し直してくれるなら良いが、そうでなくとも大したことはない、マルクスに会いに行くのも心やすらかだ」と述べている（李鋭, 2013, 180頁）。1989年4月に胡耀邦は政治局会議の席で心臓発作を起こし、その一週間後に帰らぬ人となった。胡耀邦の死去後も、党中央は彼の名誉回復に動くことはなかったが、代わって全国の学生らが胡耀邦の名誉回復を求めて動き出した。そしてそれは第二次天安門事件という夥しい流血の惨事に至る端緒となったのである。

注

- 1) 先行研究について一瞥しておこう。日本では胡耀邦に関する伝記が発表されたのは、総書記就任の前後の時期に集中している。主だったものとしては、信太謙三（1983）、和気弘（1987）、楊中美（1989）が挙げられる。一方、中国では胡耀邦に対する再評価が進みつつある状況を背景に、近年『従紅小鬼到総書記』や『胡耀邦（1915-1989）』をはじめとして、詳細かつ大部の伝記が相次いで発表されている。しかしこうした伝記は、中国の政治情勢を反映して、胡耀邦が民主化のシンボルになった経緯については、言及を避ける傾向がある。そこで本稿では、こうした伝記に学びながら、民主化のシンボルになった経緯も含めて、胡耀邦の生涯の軌跡について描くことにしたい。特に胡耀邦が民主化志向の政治改革の構想を抱くに至るプロセスに対して焦点を当てるものとする。
- 2) 李鋭によれば、胡耀邦は魏京生の逮捕に反対したものの、党内の長老のうち胡耀邦を支持したのは葉劍英だけだったとのことである（李鋭ほか, 2009, 33頁）。また逮捕後、鄧小平は、心臓に病を抱えた魏京生をあえて劣悪な環境に置こうとしたのに対して、胡耀邦は人道的な見地から、それを改めるように指示しており、後年になって魏京生から感謝されている（魏京生, 2005）。

参考文献

天児慧ほか（1999）『岩波 現代中国事典』岩波書店

『コトバンク』<https://kotobank.jp/>

『世界史の窓』<http://www.y-history.net/>

荒井利明（2011）『「敗者」からみた中国現代史』日中出版

及川淳子（2012）『現代中国の言論空間と政治文化』御茶の水書房

小林一美（2005）「中央革命根拠地における毛沢東の革命：一九三〇年末、毛沢東の『紅軍肅反』・『富田 AB

- 団急襲』をめぐって」(『神奈川大学 人文研究』No. 157、2005年12月)
- 胡耀邦(1966)『中国の青年運動』明治図書出版(小林文男編訳)⇒『中国の青年運動』
- 信太謙三(1983)『胡耀邦』日中出版
- 砂山幸雄ほか(2011)『新編 原典中国近代思想史 第7巻 世界冷戦のなかの選択：内戦から社会主義建設へ』岩波書店
- ダライ・ラマ(2009)『ダライ・ラマ自伝(第21刷)』文藝春秋(山際素男訳)
- 趙紫陽ほか(2010)『趙紫陽 極秘回想録：天安門事件「大弾圧」の舞台裏』光文社(河野純治訳)
- 張良(2001)『天安門文書』文藝春秋(アンドリュー・J・ネイサンほか監修)
- 矢吹晋(2003)『鄧小平』講談社
- 楊中美(1989)『胡耀邦：ある中国指導者の生と死』蒼蒼社(児野道子訳、矢吹晋序)
- 和気弘(1987)『胡耀邦という男：中国民主改革の星』蒼蒼社
- 李銳(2013)『中国民主改革派の主張：中国共産党私史』岩波書店(小島晋治編訳)
- 蔡孝乾(1978)『江西蘇区・紅軍西竄(第2版)』中共研究雜誌社
- 陳利明(2013)『從紅小鬼到總書記：胡耀邦 上巻・下巻』人民日報出版社⇒『從紅小鬼到總書記』
- 陳祝山ほか(1976)「駁“今不如昔”論」(『人民日報』1976年2月8日付け)⇒「駁“今不如昔”論」
- 鄧力群(2006)『鄧力群自述：十二個春秋(1975～1987)』大風出版社
- 鄧義民ほか(2012)「大宗族血縁和革命往時」(『環球人文地理』2012年第5期)
- 方勵士(2013)『方勵士自伝』天下遠見出版
- 高勇(2016)『我給胡耀邦当秘書』人民出版社
- 『光明日報』特約評論員(1978)「实践是檢驗真理的唯一標準」(『人民日報』1978年5月12日付け。原文は『光明日報』1978年5月11日付け)⇒「实践是檢驗真理的唯一標準」
- 胡耀邦(1982)「全面開創社会主义現代化建設的新局面：在中国共産党第十二次全国代表大会上的報告(1982年9月1日)」<http://book.theorychina.org/upload/805ab388-ee79-492d-b64a-92027f0339eb/>(2018年7月28日最終アクセス)⇒「全面開創社会主义現代化建設的新局面」
- 胡耀邦(2015)『胡耀邦文選』人民出版社⇒『胡耀邦文選』
- 李国愚(1985)「对鄧小平辞世之後形勢的估計及应对」(『中国之春』編輯委員會編(1993)『中国之春文選1982-1992』中国之春雜誌社に収録。原文は『中国之春』第19期、1985年1月号)
- 李銳ほか(2009)『胡耀邦與中国政治改革：12位老共産党人的反思』晨鐘書局
- 滿妹(2011)『思念依然無尽：回憶父親胡耀邦(第2版)』北京出版社
- 盛正泉(2016)「執着的瀏陽人」(『老年人』2016年第5期)
- 魏京生(2005)「敬重胡耀邦的偉大人格」(『北京之春』2005年12月号、www.beijingspring.com/bj2/2005/120/20051129151733.htm 2018年7月28日最終アクセス)
- 耀邦(1932)「共産青年団領導之下的蘇区共産兒童團三個月来的活躍情形」(中央教育科学研究所(1981)『老解放区教育資料(-)』教育科学出版社に収録。原文は『紅色中華』1932年×月27日付け)⇒「共産青年団領導之下的蘇区共産兒童團三個月来的活躍情形」
- 張黎群ほか編(2015)『胡耀邦(1915-1989) 第1巻・第2巻・第3巻』北京聯合出版公司⇒『胡耀邦(1915-1989)』
- 張黎群(2000)「胡耀邦最後の27個月」(『炎黄春秋』2000年第3期)
- 張治宇(2006)「我聽胡耀邦談防止文革重演」(『炎黄春秋』2006年第2期)